

農林水産政策研究所セミナー
(2015/9/9)

農山村における 地域資源利用の多様化と地域社会 ー担い手としての「Uターン者」の登場と背景ー

佐藤真弓(明治大学)

1.はじめに

1.はじめに

(1)はじめに

①新たな経済活動の担い手としての「Uターン者」への注目

- * 若年層の「田園回帰」現象と農山村への移住ニーズの拡大(小田切2014)
- * 「よそ者」視点や経験、ネットワークを活かした「地域起業」の萌芽(筒井ほか2014)
 - 1) 移住者にとっては、自己実現の手段であり生計を立てる手立てとなる
 - 2) 農山村にとっては、地域資源の新たな利用と地域産業の展開を促すものとして期待される

②地域社会における「Uターン者」の位置付け

- * 農山村では、これまでも若年層の「地域外生活経験者」の流入がみられた(坂本(2014)は、1970年代以降の地方圏への人口還流の動向を把握)
- * こうした多様な「Uターン」の動きを農山村経済の持続的な展開に結びつけるためには、地域産業の形成における担い手の全体状況のなかにこれらの動きを位置づけ、それぞれが置かれている現状を明らかにしていく必要がある
- * 本報告では、「地域外での生活経験者」(Uターン者)の登場とその背景について地域社会との関わりから検討する

1.はじめに

(2) 分析枠組み

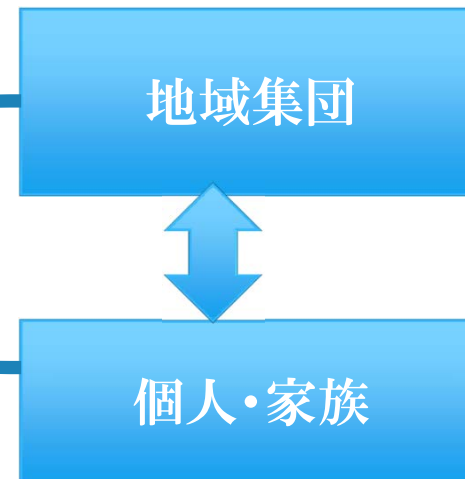
- 農山村における地域産業の展開を捉える方法 -

【分析②】地域社会の変化



【分析①】地域資源利用の変容

【分析②-1】地域集団の再編



【分析②-2】民宿の世代交代

地域外での生活経験者
(Uターン者)

(3) 分析①

スキー場立地地域における地域資源利用の変容

① スキー場立地地域で進んだ地域資源の非農林業的利用

- * 事例対象地域として、全国的にスキー場が集中する長野県北部の豪雪山村を取り上げる(渡辺1999)
- * わが国の農山村において地域資源利用の多様化は、林業後発地域において観光開発として展開(土屋1984)
- * スキー場開発は高度経済成長期に進み、バブル経済期に拡大(呉羽1999)

② スキー場立地地域における新たな地域資源利用の展開

- * しかし、スキー場を取り巻く環境は近年大きく変化
リフト輸送実績:7億5,400万人(1992年)→3億4,200万人(2007年)
- * スキー場立地地域では、スキー場の縮小再編が進められている
(長野県「スキー場の今後の展開に関する検討会」設置、2008年)
- * 通年観光化などによる新たな地域資源利用が模索されている

(4) 分析②-1

担い手としての地域集団とその再編

① スキー場の導入と地域集団

- * スキー場の導入においては、生活と生産の共同組織としての集落が重要な役割を発揮した
- * 集落での社会関係や物的基盤を動員しながら、スキー場や「民宿村」の形成を図った事例が報告されている (小西1980、土屋1997)

② 通年型観光の推進と地域集団

- * スキー観光から通年型観光への転換期においては、スキー観光を担う地域集団から通年型観光に関わる地域集団への再編が課題となる

(5) 分析②-2

担い手としての民宿とその世代交代

① 地域資源の担い手としての民宿

- * 民宿は地域資源を経営資源として利用しながら民宿経営を実現している

② 民宿構成員の地域資源への関与の仕方を捉える視点

1) ライフコース

- * 学卒時や民宿継承期の時代状況に規定されると予想される
- * ライフコース分析を用いることで、地域社会の変動が個人の人生に与える影響を説明することができる(森岡・青井1991、大友・堤2013)

2) 性別役割分担

- * 家族経営を基本とする民宿においては、家族内での役割分担関係も構成員の地域資源利用に影響を与えることが予想される

(6) 本報告の構成

1節 はじめに

2節 事例対象地域の概況 (長野県飯山市)

3節 地域産業の展開と地域資源 (分析1)

I 期「農林業」→ II 期「スキー観光」→ III 期「通年型観光」

4節 地域資源利用の変容と地域集団 (分析2-①)

I 期「集落」→ II 期「スキー場関連団体」→ III 期「新たな地域集団」

5節 地域資源利用の変容と民宿の世代交代 (分析2-②)

各世代のライフコース / 性別役割分担

6節 おわりに

総括と今後の課題・展望

2.事例対象地域の概況

2.事例対象地域の概況

(1)長野県飯山市の概況

項目	特徴
立地	新潟県境に位置する豪雪地帯
人口	2万2,400人(2010年国勢調査)
世帯数	7,700世帯(同上)
高齢化率	32%(長野県平均28%)
基幹産業	①農業 ・総農家数2,630戸 ・米を中心に、キノコやアスパラガス生産なども盛ん
	②スキー観光業 ・大正期に導入される ・戦後の高度経済成長期に本格的展開 ・スキー観光の停滞と通年型観光の推進 スキー場入込客数:143万6,000人(1991年)→34万人(2014年)

2.事例対象地域の概況

(2) 飯山市内のスキー場の概況

スキー場の 名称	開設年	現状	リフト数 (最大)	資本の性格による スキー場運営会社の類型
信濃平	1956	閉鎖(01年)	6基	「地元出資」
戸狩温泉	1956	営業中	7基(14基)	「地元出資」→「共同出資」
北竜温泉	1962	営業中	2基	「外部出資」
北飯山	1964	閉鎖(76年)	2基	「地元出資」
斑尾高原	1972	営業中	12基	「外部出資」
飯山国際	1973	閉鎖(01年)	4基	「外部出資」
戸狩小境	1973	閉鎖(83年)	2基	「地元出資」
斑尾サンパ ティック	1984	営業中	2基	「外部出資」

3.飯山市太田地区における 地域産業の展開と地域資源 (分析①)

3.地域産業の展開と地域資源

(1) I 期 「農林業」 (～高度経済成長期)

①太田地区の概況

- * 飯山市街地の北側に位置する中山間地域
(人口2,295人、総世帯数814高齢化率35.0%)
- * 昭和の合併時の旧村に対応
(旧太田村)
- * 昭和31年、飯山市に編入される

②稲作を中心とした複合的な地域経済構造とその崩壊

- * 米に加え、多様な商品作物を生産 (養蚕、葉タバコ、ホップなど)
- * 豊富な林野を利用した、木材や木炭の製造・販売
- * 冬季の副業として、わら製品を製造・販売
- * しかし、「エネルギー革命」やビニール製品の普及などを背景に、冬季の収入源を失う
- * 急増した出稼ぎ労働の解消を目的に、冬季の地域産業の導入が求められるようになった

3.地域産業の展開と地域資源

(2)Ⅱ期「スキー観光」 (1960年代～1990年代初頭)

①スキー場の導入

- * 裏山を整備し、「太田スキー場」(第1ゲレンデ)を開設(1956年)
- * 近隣集落の住民出資により、第1号リフトを建設(1960年)
- * スキー場運営会社「戸狩観光(株)」の設立
- * 第2ゲレンデの開設と「太田観光(株)」の設立(1962年)

②スキー場の拡大

- * 奥地開発により中上級者向けコース(第3ゲレンデ)を整備(1970年代)
- * 温泉掘削成功を契機としてスキー場運営会社を合併
(1991年「戸狩観光開発(株)」)
- * スキー場は最盛期を迎える (入込客数55万5,700人、関連従業員500人)

③民宿の開発

- * 農家の副業として導入される (1950年代後半)
- * 大手旅行会社の参入と民宿の大規模化 (1980年代)

(3) Ⅲ期 「通年型観光」①

(1990年後半～)

① スキー観光の停滞

- * スキー場入込客数の大幅な減少
13万3,370人(2014年)
- * スキー場の縮小
リフト:14基→7基 ゲレンデ面積:113ha→102ha

② スキー場運営会社の再編

- 1) 私的整理による経営再建(2006年)
 - * 戸狩観光開発(株)を解散し、戸狩観光(株)を設立
- 2) 法的整理と外部資本の導入
 - * 民事再生法の適用申請(2013年)
 - * 戸狩観光(株)を解散し、戸狩温泉スキー場(株)を設立
(滋賀県の会社が戸狩温泉スキー場の運営を受託)
 - * 地元出資者も引き続き会社運営に携わる

3.地域産業の展開と地域資源

(4) Ⅲ期 「通年型観光」② (1990年後半～)

①「自然体験教室事業」

- * 戸狩観光協会を窓口とした各学校の受け入れ(年間54校、7,900人)
- * 民宿での10人前後の「少人数分宿」により、多様な体験プログラムを提供(農業体験、自然体験、農村文化体験など)

②「オフシーズンのゲレンデや民宿街を活用したイベントの開催」

「戸狩ふれあいアート展」(5月)、「花結びイベント」(7月)、「飯山さわごさ」(8月)、
「戸狩満喫御膳」(11月)など

③「トレッキングルートの整備・保全活動」

- * 2008年、全長80kmのロングトレイルが開通(NPO法人信越トレイルクラブ)
- * 信越トレイル利用者の誘致を目的に、ルートマップの作成やガイドなどを行う(戸狩トレイルクラブ)

3.地域産業の展開と地域資源利用

(4) 太田地区における地域産業の展開と 地域資源利用の多様化

<Ⅰ期 農林業>

<Ⅱ期 スキー観光>

<Ⅲ期 通年型観光>

米、木材、製炭、藁製品など



農地、林野
(部落有林)

スキー場



農地、林野
(部落有林、国有林)

体験プログラム、イベントなど



既存の地域資源に
新たな意味を付与

農山村空間全体
(自然景観、生活技術・文化)

4.飯山市太田地区における 地域資源利用の変容と地域集団 (分析②-1)

4. 地域資源利用の変容と地域集団

(1) 生活・生産の共同組織としての集落 (Ⅰ期「農林業」)

① 集落による地域資源の利用と管理

- * 生活や生産における共同労働は、集落を単位として行われた
(農作業、水管理、道普請、除雪など)
- * 各集落は林野を共同所有し、木材販売などによって得られた収益は集落財政に組み込まれた

② 太田地区と各集落

- * 12集落から構成される
- * 明治初期の村の範囲とほぼ重なり合う

4. 地域資源利用の変容と地域集団

(2) 生活・生産の近代化とスキー場関連団体 (Ⅱ期「スキー観光」)

① 集落による共同労働の減少

- * 農作業や除雪の機械化などを背景に、集落単位での地域資源利用は減少
- * 部落有林への関わりは「管理」作業に限られるようになる(枝打ち、下草刈り)

② 林野利用の担い手としての「スキー場関連団体」の形成

	スキー場運営会社 (戸狩温泉スキー場(株))	観光協会 (戸狩観光協会)
事業内容	リフトやゲレンデの管理・運営、リフト券の 販売、温泉施設や食堂・売店の運営など	観光客の誘致や営業・宣伝活動、 イベントの開催、研修など
構成員	株主:約120 (民宿、地元商店など)	協会員:160 (民宿、地元商店など)
従業員	19名 (うち12名が正社員)	3名(戸狩温泉スキー場(株)から の出向職員)

(3) スキー場関連団体と集落

① 集落を基盤として形成されたスキー場関連団体

- * 「スキー場運営会社」や「観光協会」の構成員として
- * リフト建設における資金提供者として
- * スキー場開設における土地提供者として
- * スキー場の整備・運営における労働力提供者として

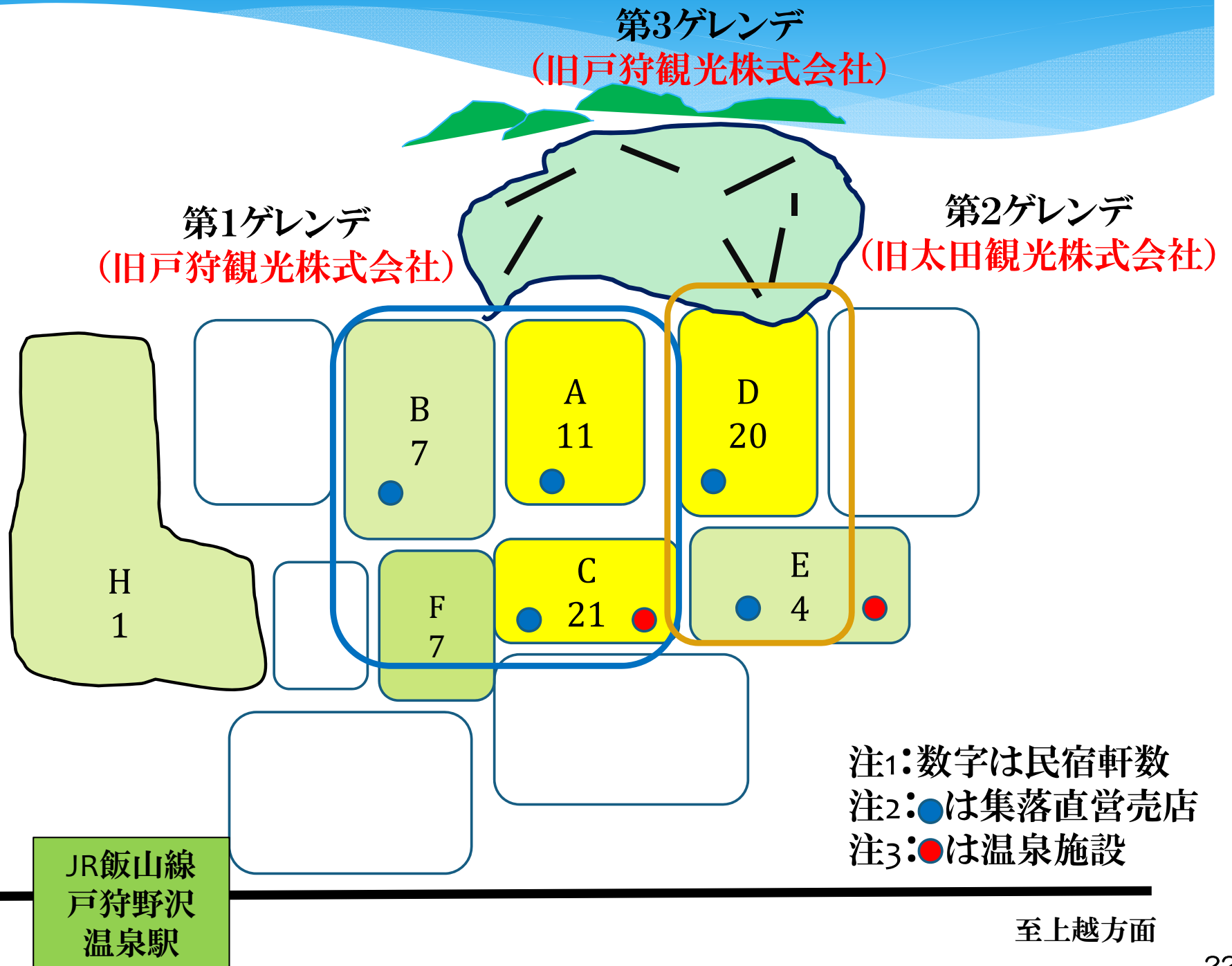
② スキー場の拡大に伴い存在感を増す「スキー場運営会社」

- * スキー場運営からの集落の撤退
(ゲレンデ管理主体の変化、資金調達方法の変化など)
- * スキー場運営会社による観光協会運営に対する支援
(職員の派遣、資金援助など)

スキー場関連団体と集落

集落名	総世帯数	民宿軒数 ()内は74年 時点	集落直営 食堂・売店 軒数	スキー場運営会社	土地 提供	観光協会	支部
A	32	11 (18)	2 (閉鎖)	戸狩観光→ 戸狩観光開発→ 戸狩観光→ 戸狩温泉スキー場	個人、 部落 有林	太田観光 協会 ↓ 戸狩観光 協会	○
B	44	7 (25)					○
C	27	21 (26)	1		個人		○
D	57	20 (28)	2	太田観光→ 戸狩観光開発→ 戸狩観光→ 戸狩温泉スキー場	個人		○
E	56	4 (19)	2		個人		○
F	17	7 (14)					○
H	96	1 (資料なし)		小境観光 (解散)		小境観光 (解散)	
他	350	0 (13)					
計	679	70 (143)	7				6

戸狩温泉スキー場と集落



4. 地域資源利用の変容と地域集団

(4) 脱スキーと利用主体の多様化(Ⅲ期「通年型観光」)

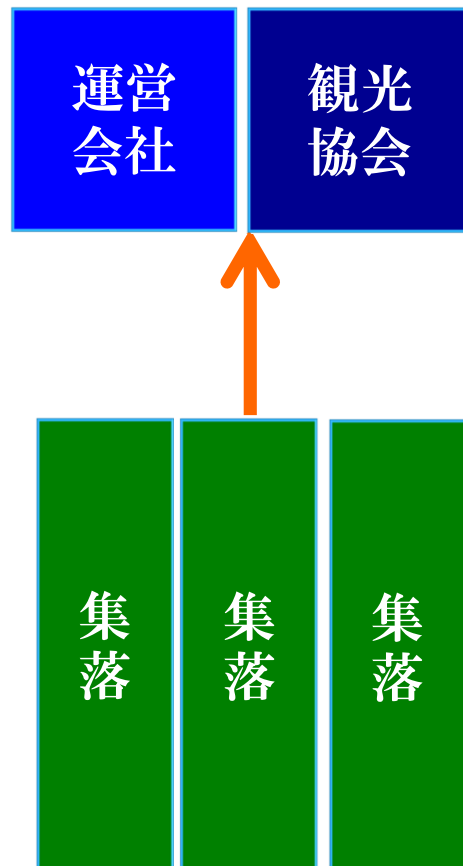
新たな地域集団	活動内容	組織の特徴など
戸狩観光協会 「 <u>女性部</u> 」	イベント開催 「花結び」 「戸狩ふれあいアート展」 「戸狩満喫御膳」など	・<u>民宿経営者の配偶者を構成員とする組織</u> ・親睦活動、研修などに取り組む ・日常的な活動は集落を範囲とする「支部」単位で実施 ・<u>イベント開催時には女性部全体から参加者を募る</u> (外部組織との連携も) ・「婦人部」から名称を変更(2006年) ・戸狩観光協会ですべての女性理事の誕生(2012年)
戸狩観光協会 支部組織 「 <u>体験グループ</u> 」	体験型観光 「 <u>自然体験教室事業</u> 」	・学校ごとに共通した献立や体験プログラムを準備 ・<u>教員が巡回しやすく、日常的な連携も取りやすい、集落を範囲とした「支部」単位での実施</u> (6支部70軒のうち5支部40軒が参加)
<u>民宿経営者グループ</u> 「 <u>戸狩トレイルクラブ</u> 」	トレッキング ルートの保全・整備活動	・民宿経営者の有志約30名で発足 ・山道の保全活動は<u>部落有林の管理にもつながっている</u>
<u>民宿後継者を中心としたネットワーク</u>	イベント開催 「 <u>飯山さわごさ</u> 」	・<u>飯山市内在住の20～30歳代の約15名が「実行委員」として活動</u>(歴代の実行委員長は民宿後継者) ・<u>学校や職場での人間関係を基盤とする</u> ・<u>構成員には入れ替わりがみられる</u>

4. 地域資源利用の変容と地域集団

(5) 太田地区における 地域資源利用の変容と地域集団の再編①

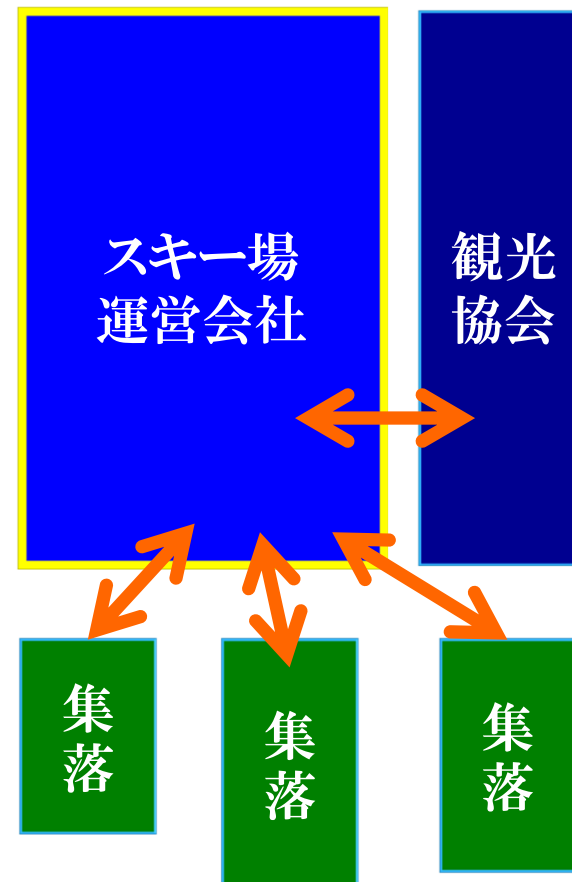
< I 期 農林業 >

(スキー場の導入)



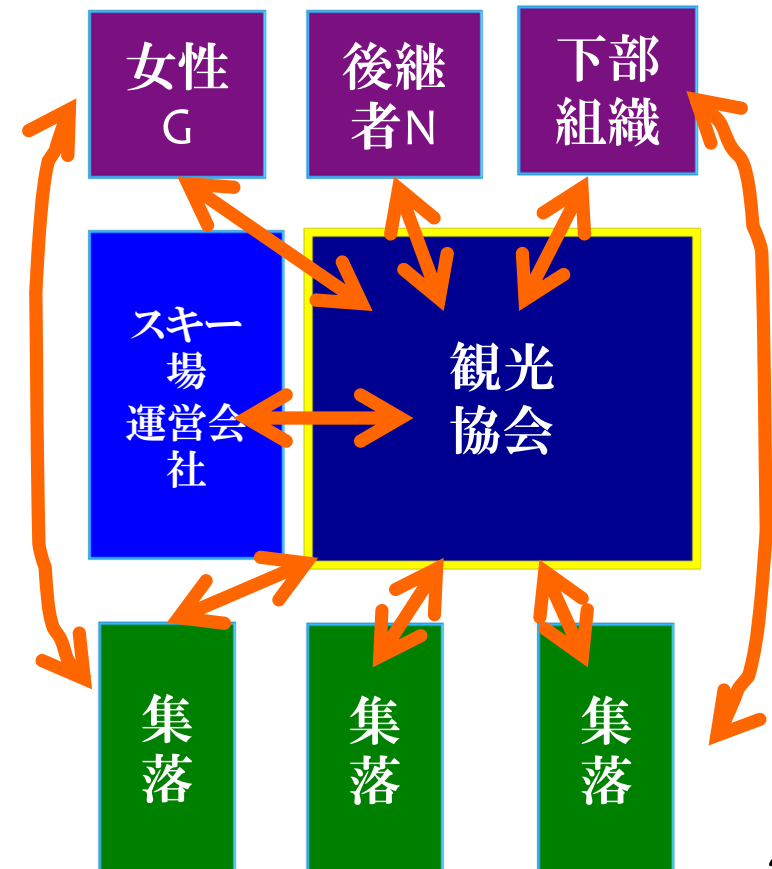
< II 期 スキー観光 >

(スキー場の拡大)



< III 期 通年型観光 >

(新たな地域集団の登場)



4. 地域資源利用の変容と地域集団

(6) 太田地区における 地域資源利用の変容と地域集団の再編②

①「農林業」から「スキー観光」への転換と地域集団

- * 地域資源の転換利用を担ったのは、集落から派生した「スキー場運営会社」と「観光協会」(集落の機能集団化)

②「スキー観光」から「通年型観光」への転換と地域集団

- * 地域資源の転換利用を担ったのは、戸狩観光協会から派生した新たな地域集団 (「ネットワーク」型の組織)
 - 1) 個人を参加単位とする
 - 2) 構成員は流動的に変化
 - 3) 学校や職場での人間関係を基盤とした仲間集団もみられる
 - 4) 構成員の基盤とする地域社会は飯山市全域へ拡大

③重要性を増す地域資源「管理」主体としての集落の役割

- * 新たな地域集団が地域資源利用の「再発見」を進めるためには、地域資源の日常的な管理が必要となるが、現状では管理まで担いきれていない

5.飯山市太田地区における 地域資源利用の変容と民宿の世代交代 (分析②-2)

5. 地域資源利用の変容と民宿の世代交代

(1) 各世代のライフコースの特徴

世代類型 (人数)	現在の年齢 (出生時期)	学卒時の状況	民宿経営の特徴
1代目 「開業」 男3人、女10人	80歳を中心とする世代 (昭和ヒトケタ～10年代生まれ)	・高度経済成長期以前に卒業 ・農林業と出稼ぎに従事	・農家家屋を利用し民宿を開設(30～40歳頃) ・スキー場構想が持ち上がった1955年頃に青年期を迎える ・経営継承後は自家農業に従事
2代目 「経営者」 男16人、女18人	60歳を中心とする世代 (S20～30年代生まれ)	・スキー場が拡大し始める頃に学校を卒業 ・他産業に従事しながら親の民宿業を手伝う	・スキー場が最盛期を迎える1980年代後半頃に民宿を継承(30歳代後半～40歳代) ・民宿の規模拡大を図る
3代目 「後継者」 男8人、女8人	40歳を中心とする世代 (S40～50年代生まれ)	・スキー場の停滞期に学校を卒業 ・進学や就職を契機に市外での生活を経験	・地域外での生活・就業経験を活かして新規事業を立ち上げる(レストラン、アウトドア部門などによる民宿経営の多角化) ・低コストで事業を導入 ・県外から移住者の流入(夫婦で「Iターン」)

(2) 各世代の性別役割分担

世代	男性	女性	特徴
1代目 「開業者」	・帳場と接客 (経営)	・料理と掃除	・家族内での役割分担がそのまま民宿経営にも反映されていた
2代目 「経営者」	・帳場と接客 (経営)	・料理と掃除 (Ⅱ期) ↓ ・接客、営業、 イベント企画・ 運営(Ⅲ期)	・通年型観光の推進を背景に、「2代目女性」が表舞台に登場 ・「2代目男性」はスキー場関連団体の再編に対応
3代目 「後継者」	・新規事業の立ち上げ (経営)	・育児により民宿への関与は部分的	・「跡取り娘」による経営参画の増加

5. 地域資源利用の変容と民宿の世代交代

(3) 各世代のライフコースと性別役割分担の実態 -事例民宿B-1より-

①世帯の概況

- * 4世代7人家族
- * 世帯主(60代)、妻(50代)、長男(30代)、長男の妻(30代)、孫、父(90代)、母(90代)
- * 米(50a)と野菜(10a)を作付け
- * 民宿で使用するほか、米の直接販売などを行う

②民宿の概況

- * 民宿は大規模(収容人数:68人、16室)
- * 1972年、開業
- * 1995年、新館の建設と温泉の導入
- * 2007年、アウトドア事業の導入

5. 地域資源利用の変容と民宿の世代交代

(4) ライフコースと性別役割分担①

-事例民宿B-1より-

世代類型	男性(夫)	女性(妻)
開業者	【1代目男性】 ・大正期生まれ ・学卒後、農林業従事 ・<u>民宿開業後も農林業や出稼ぎに従事</u>	【1代目女性】 ・<u>太田地区出身</u> ・結婚後、夫ともに農林業従事 ・民宿開業後は、長男とともに民宿業に従事
現在の経営者	【2代目男性】 ・農業高校卒業後、農事組合法人に就職(1972年) ・冬季は民宿を手伝う ・<u>新館建設と温泉導入を機に民宿経営を継承(1995年)</u> ・スキー場運営会社や観光協会の役員も務めてきた	【2代目女性】 ・県外出身。短大卒業後、<u>結婚を機に転入</u> ・<u>事務職をしながら子育て、民宿と農業を手伝う</u> ・夫の経営継承を機に本格的に民宿業に従事 ・<u>義父母の介護を経て、現在は民宿経営全般を担う(料理、接客、営業、経理など)</u> ・高齢の義父母に代わり<u>畑の管理を担う(5年程前から)</u> ・家事は息子の妻と分担

(5) ライフコースと性別役割分担②

－事例民宿B-1より－

世代類型	男性(夫)	女性(妻)
後継者	【3代目男性】 ・市内の高校卒業後、東京で進学、就職(1996～2007年) ・民宿の一部門として、アウトドア事業を開始 ・川でのアウトドア事業は「低コストでの起業が可能」 ・当初は、民宿のHP上で、宿泊とセットでプログラムを販売(カヌー、ラフティング) ・現在は、繁忙期にはアルバイト従業員を雇用(利用客は年々増加) ・スキー場運営会社や観光協会の役員や「飯山さわごさ」実行委員長などを務める(地域活動にも積極的)	【3代目女性】 ・県外出身 ・地域振興にかかわる仕事に従事 ・結婚を機に転入 ・第1子出産後は、育児を中心に、家事および民宿の補助的業務を担う ・食や農への関心は高く、畑の一角で野菜を栽培 ・観光協会女性部の講習会などにも参加 (「きのこマイスター」取得)

5. 地域資源利用の変容と民宿の世代交代

(6)「Iターン」夫婦による活動の経緯と現状 -事例民宿B-2より-

①移住の経緯

- * 2012年、夫婦で県外から移住し、夫の祖父の生家を引き継ぐ (農地、民宿)
- * 1984年、東京都出身 (31歳)
- * 大学で「世界の水問題」について学んだ後、農業法人に就職

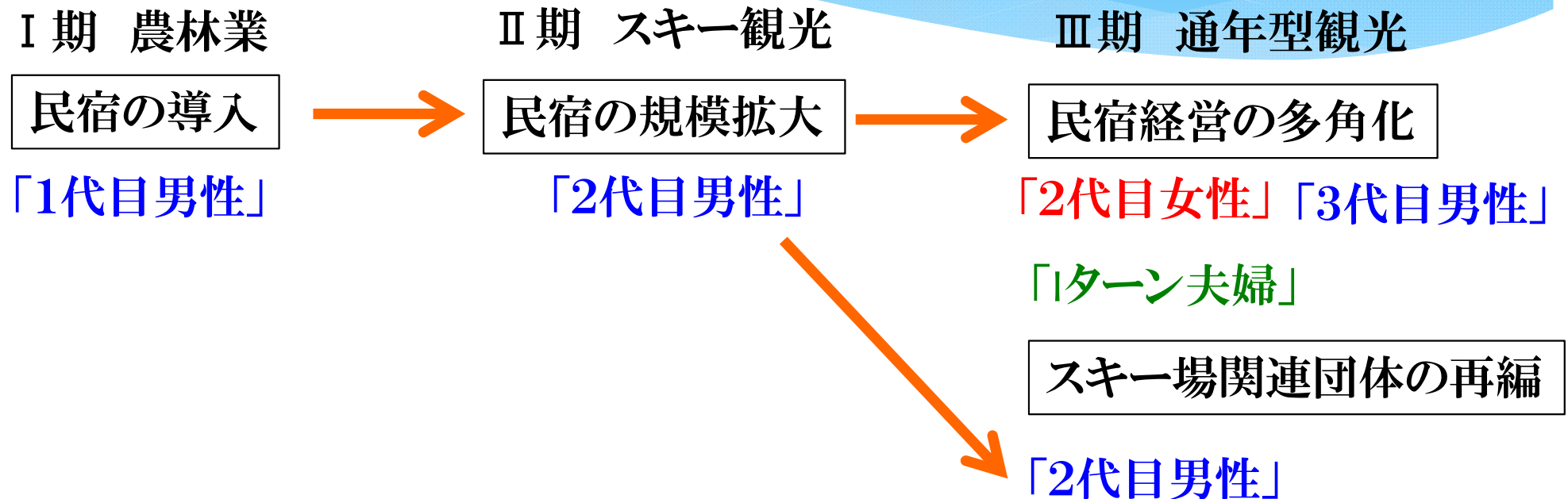
②移住後の事業展開

- * 「山の農業を経済的に成り立たせる仕組みの構築」をコンセプトに株式会社を設立 (夫婦で部門ごとに分担)
 - 1) 米1haと野菜60a有機で栽培 (「宅配BOX」で直接販売)
 - 2) 農家民宿の経営 (大学の研修旅行など)
 - 3) 余剰農産物を使った加工品製造・販売 (妻は調理師免許保持)
 - 4) タイで農場を開設

③地域活動

- * 集落活動や女性グループによる活動にも積極的に参加し、人間関係の構築や技術継承に努める

(7) 民宿の世代交代と地域資源利用①



世代交代のたびに進む地域資源の「再発見」

- * 各世代は、ライフコースと性別による影響を受けつつも、親世代が構築した経営を批判的に継承しながら独自の経営を展開してきた

(8) 民宿の世代交代と地域資源利用②

① 男女間にみられる世代交代の時間差

- * 男性の世代交代と女性の世代交代には時間差がみられる
(「**民宿や農業の経営継承**」と「**家事や畑仕事の主導権移行**」)
- * 結果として、女性の世代交代は男性よりも一世代遅れてやってくる

② 通年型観光を担う「2代目女性」の登場

- * 結婚を契機とした「Iターン」者であり、地域外での生活経験者が初めて大量に流入した世代(「**1代目女性**」10名のうち市外出身者は2名のみ)
- * 多様な職業キャリアを活かしながら、経営者の妻として民宿の通年開業化を担っている

③ 後継者世代にみられる変化

- * 「3代目女性」のライフコースの多様化を背景として、参画ルートが多様化
- * 「2代目女性」との関係が変化し、畑仕事などの裁量権を早くから持つことができるようになった
- * しかし家族内での役割分担関係の変化は夫婦関係の変化には及んでいない

6.おわりに

6.おわりに

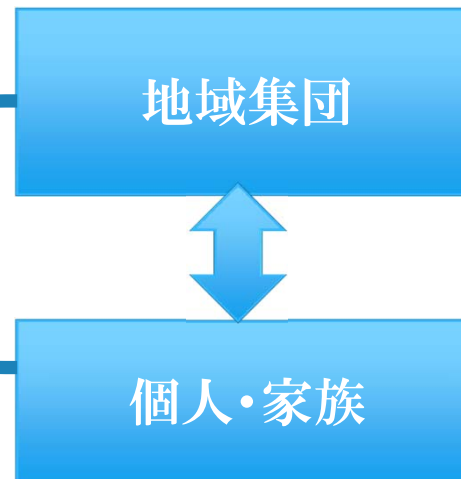
(1) 分析枠組み(再掲)

- 農山村における地域産業の展開を捉える方法 -

【分析②】地域社会の変化



【分析②-1】地域集団の再編



【分析②-2】民宿の世代交代

【分析①】地域資源利用の変容

(2) 総括と今後の課題①

—新たな地域産業形成にむけて—

①地域資源利用の多様化と「再発見」

- * 地域資源利用は大きく変化してきた
「農林業的利用」→「スキー場としての利用」→「通年型観光による新たな利用」
- * 利用の対象となる地域資源の範囲も拡大している
農地や部落有林→農山村空間全体
- * 今後は地域資源の総動員と再発見が課題となる

②地域集団の再編と地域資源「管理」体制の再構築

- * 地域資源利用を担う地域集団の再編は、地域資源利用の変容に対応し、その性格を変化させてきた
基礎的集団としての「集落」→機能集団としての「スキー場関連団体」
→ネットワーク集団としての「年齢・性別による様々な地域集団」
- * 一定の地域範囲において利用と管理を担う地域集団は形成されにくく、管理の大部分を集落に依存せざるを得ない状況にある
- * 今後集落機能の低下が予想されるなか、将来の地域産業形成を視野に入れ、新たな地域集団が地域資源「管理」に自覚的に取り組むことが必要 (中田2011)

(3) 総括と今後の課題②

—新たな地域産業形成にむけて—

③世代と性別により異なる地域資源利用

- * 民宿の世代交代は、一方では世代特有の経験や価値観に規定されながら、他方では、家族内での性別役割分担の影響を受けながら進んでいる
- * 今後、「第3世代」が新しい地域資源利用を提案し、地域産業を再構築していくことが課題となる
- * 「3代目女性」による新たな地域資源利用を促すためには、固定的な性別役割分担関係の解消が求められる

(4)おわりに①

-新たな地域産業形成と「Uターン」-

①「Uターン者」の多様なキャリアを活用した地域産業の構築

* 地域産業形成を担う「第3世代」において、地域外での生活経験者は少数派ではない

1) 地域外での生活経験者の本格的流入は1980年前後からみられた
(「2代目女性」の結婚に伴う「Iターン」)

2) 「Uターン」の本格化は90年代後半以降 (「3代目後継者世代」)

3) 現在の若年層の「Iターン」はこれらのうえに展開 (狭義の「Iターン」)

* 「第3世代」の多様で豊富なキャリアを地域産業形成に活かすための体制整備が求められる

②世代交代を促す仕組みの構築

* とはいえ、家族基盤の有無という点で見れば、狭義の「Iターン者」とその他の「Uターン」の置かれる状況はまったく異なっている

(継承可能な経営基盤を持たない一方で、上の世代との関係に制約を受けず自由な経営展開が可能)

* 家族内外において経営継承を促す仕組みを構築していく必要がある

(5) おわりに②

-新たな地域産業形成と「Uターン」-

③世代特徴をふまえた地域集団の形成

- * 「第3世代」は地域社会の構成員全体からみれば少数派であり、地域内において同世代での集団形成の機会は上の世代と比べ限られている
- * 一方で、社会関係は地域外に広がる傾向にある
- * こうした社会関係の世代特徴をふまえた地域集団の形成に対する支援が求められる

引用文献一覧

- * 小西正雄、1980、妙高高原・杉野沢地区における民宿村の成立過程とその内部構造、人文地理、32(4)
- * 呉羽正昭、1999、日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容、日本生態学会誌、49
- * 森岡清美・青井和夫編、1991、現代日本人のライフコース、日本学術出版
- * 中田実、2011、地域共同管理組織としての〈むら〉と〈まち〉、日本村落研究学会企画・池上甲一編、都市資源の〈むら〉的利用と共同管理、農山漁村文化協会
- * 小田切徳美、2014、農山村は消滅しない、岩波新書
- * 大友由紀子・堤マサエ、2012、女性農業者のライフコースからみた職業キャリアの展開—水沢地方農業担い手女性塾メンバーの場合より—、日本村落研究学会企画、原珠里・大内雅利編、農村社会を組みかえる女性たち、農山漁村文化協会
- * 坂本誠、2014、人口減少対策を考える—真の「田園回帰」時代を実現するためにできること、JC総研レポート、32
- * 土屋俊幸、1997、スキー場開発の展開と土地所有—「共同体的土地所有」の意味、松村和則編、山村の開発と環境保全、南窓社
- * 土屋俊幸、1984、公有林野における観光開発—地方自治体による自主開発の分析、筒井迪夫編、公有林野の現状と課題、日本林業調査会
- * 筒井一伸・嵩和雄・佐久間康富、2014、移住者の地域起業による農山村再生、筑波書房
- * 渡辺隆一、1999、長野県におけるスキー場開発をめぐる自然保護問題、日本生態学会誌、49